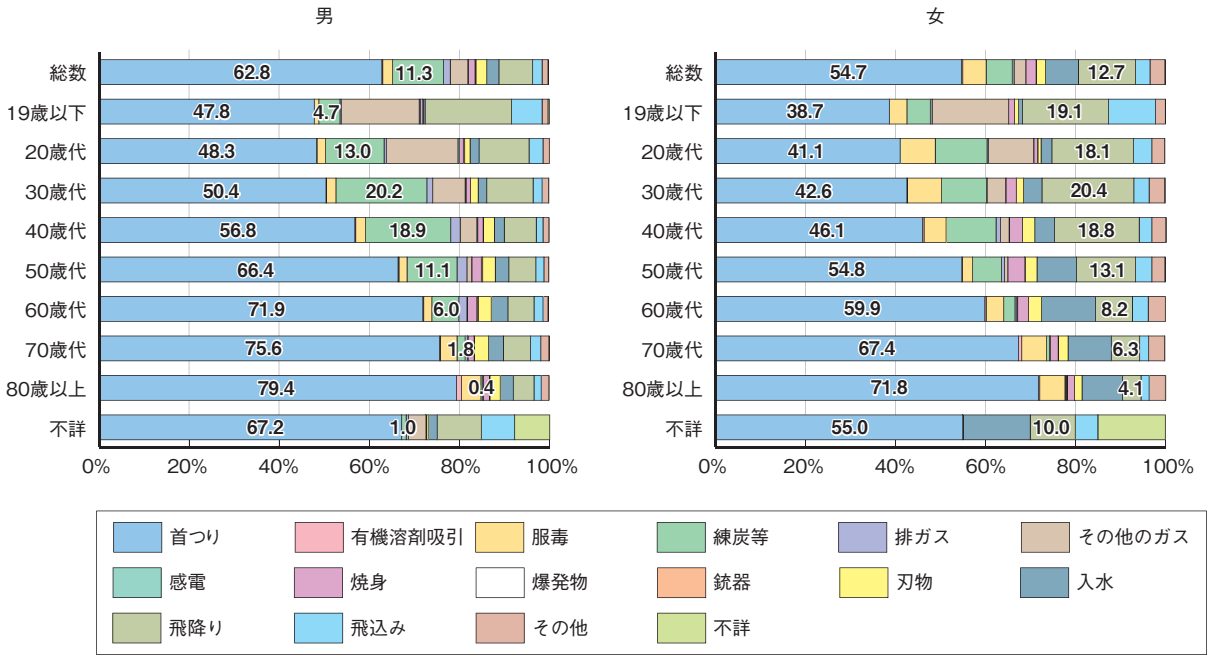
10 手段別の自殺の状況

平成20年における手段別の自殺の状況について自殺統計によれば（第１－30図）、男女とも「首つり」が最も多く、半数を超えている。男性は「首つり」１万4,349人（62.8％）が最も多く、次いで「練炭等」2,587人（11.3％）、「飛降り」1,709人（7.5％）となっており、女性は「首つり」5,152人（54.7％）が最も多く、次いで「飛降り」1,195人（12.7％）、「入水」692人（7.3％）となっている。

また、男女別・年齢階級別でみると、男女とも全ての年代で「首つり」が最も多い。男性については、「首つり」に次いで、19歳以下は「飛降り」、「その他のガス」の順で多く、20歳代では、「その他のガス」、「練炭等」の順で多くなっている。30歳代～60歳代は「練炭等」、「飛降り」の順で多くなっており、70歳以上は「飛降り」、「服毒」の順で多くなっている。女性については、「首つり」に次いで、59歳以下は「飛降り」が多く、60歳以上は「入水」が多くなっている。

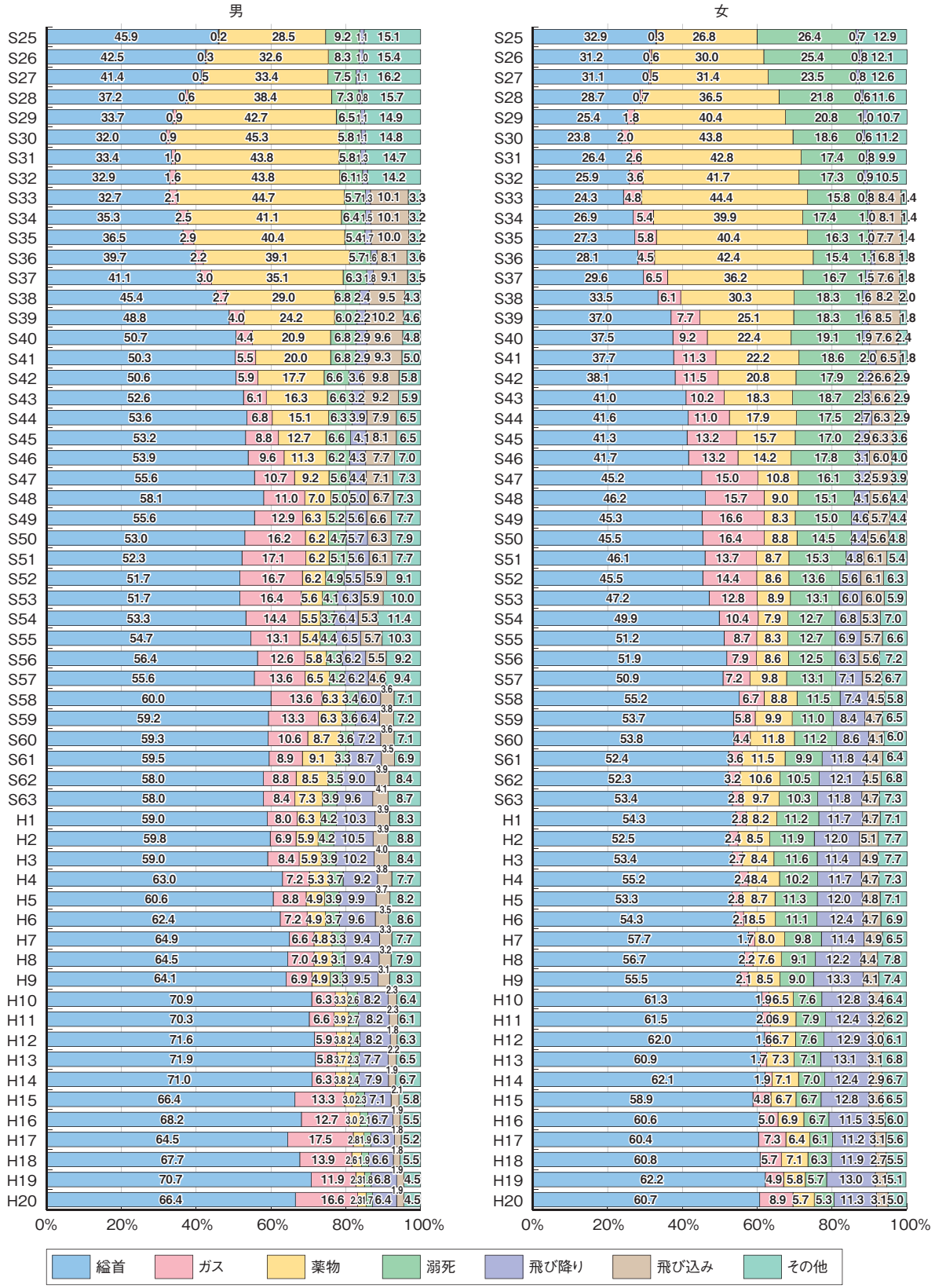
第1-30図　平成20年における男女別･年齢階級別（10歳階級）･自殺の手段別の自殺者数の構成割合



資料：警察庁「自殺統計」より内閣府作成

次に、手段別の推移について人口動態によれば（第１－31図）、昭和20年代後半～30年代後半にかけては男女ともに「薬物」が最も多かったが、毒物・劇物の取扱に対する法規制の強化と指導・取締の徹底により、その後は「薬物」が激減した。40年代以降は「縊首」が増加し、男女とも「縊首」が最も多い傾向が続いている。

第1-31図　手段別の自殺者数の構成割合



注意：1）昭和25年～32年と平成7年以降の「故意の自傷の続発・後遺症」は自殺の合計には含まない。
　　2）昭和25年～32年の「飛び込み」は分類されず、「その他」に含まれる。

資料：平成15年までは厚生労働省「人口動態統計特殊報告」、
　　平成16年以降は厚生労働省「人口動態統計」より内閣府作成